

現代革命とアントニオ・グラムシ革命論

グラムシ研究会 大伴一人

現代革命と アントニオ・グラムシの革命論

はじめに

(略歴) アントニオ・グラムシはイタリアのサルジニア島で1891年に生まれた革命家である。彼は、42年間の生涯のうち14年間を獄中で過ごし、膨大な著作を残した。

グラムシの思想はマルクスやレーニン思想(権力闘争論)を継承しており、内容的には、組織論や自己統治社会(ソチエタ・レゴラータ)論や、サバルタン論などでスターリニズムの組織論や社会の建設論を批判している。現代革命の思想としては驚くべき豊富な内容をもっている。

グラムシをとりまく厳しい状況(障害・病気・獄中闘争)を考えてみると、イタリアのファシズム社会の差別と抑圧と激しい弾圧の中で、彼の怒りと苦しみを真つ正面で受け止めて行く必要がある。

グラムシの思想は、一人のマルクス主義者、レーニン主義者として深い理論的水準を学び取り、それを乗り越えんとしたものである。彼の血と汗と生命活動をかけた思想と、その

人間的感性は、我々労働者人民の魂を揺さぶり、プロレタリア人民の革命の内容と展望を切り拓くものである。

ロシア革命の中に身を置き、1919年から1920年に起こったトリノを中軸にした労働者の蜂起戦(赤い2年間)の指導とその敗北の総括から学びとり、彼の優れた知性と結びついた現代革命論として労働者人民を共産主義社会へと導く思想である。また彼の思想は、現代革命論として具体的な政治政策をイメージ出来る深い内容を持っていると思う。

第一章 革命党	一頁
第二章 労働者評議会(ソビエト・コミューン)	五頁
第三章 労働組合	六頁
第四章 ヘゲモニーについて	八頁
第五章 反軍闘争の重要性	九頁
第六章 マルクス主義国家とは何か	十二頁
① 従来の国家論	
② グラムシの国家論	
第七章 構造改良論批判	十三頁
第八章 サバルタンとは何か	十五頁
第九章 ソチエタ・レゴラータ	十九頁
第十章 陣地戦と機動戦	二十三頁
終わりに	二十五頁

第一章 革命党について

プロレタリア革命の階級闘争における歴史的役割は、資本主義社会の性格によって規定される。1万年以上と言われる階級闘争における最後の闘いであり、資本主義社会を根底から覆し共産主義社会を実現せんとする人類史的な使命を持った革命である。この革命は、当然世界革命であり、暴力革命を本質としている。

階級社会の発生と戦争の発生・軍隊の登場

暴力・戦争は、私有財産の発生と共に発生している。この事は、今日、戦争の考古学的研究によって明らかにされてきている。階級社会の発生は、西南アジア・ヨーロッパ・中国などでは、食料採取段階(フード・ギャザリング)から食料生産(フード・プロデュシング)への転換が「新石器時代」に実現している。農業の開始と世界的本格化である。約8000年ほど前である。

日本では農業は縄文時代晩期から始まり、弥生時代に本格的に開始された。この時代は、日本で初めて金属器(青銅器・鉄器)が制作・使用された時代である。日本は約3000年前である。

この時代に私有財産制が発生し、階級社会、(持つ者と持たざる者がいる社会)が発生し、同時に100万年以上続いてきた戦争の性格が一変した。それまでの原始的な共同体間の食料や女性を奪い合うという共同体の生存権を巡る争いから、私有財産とその所有権の奪い合いという戦争へと質的に変化した。

戦争は私有財産を、敵の共同体から私有財産を奪い取るという目的意識性を持ち、政治的・経済的・組織的・権力闘争化し巨大な軍事組織(軍隊)が発生した。

蓄積された私有財産は、巨大化し、それを独占する支配者が登場した。(古代エジプト・古代ローマ・中国の秦などの巨大な独裁国家を生み出した。)私有財産の継承権の正当性は血統によるしかなく、戦争や政治を指導する男子が財産の継承権を持った。社会の在り方が、「母系的な共同社会」から「男子を中軸にする階級社会」へと変化したのだ。

日本では、古代の大和朝廷である。戦争は大規模化し勝利すれば敵の共同体は、絶滅させるか、女性に子供を産ませ、男性は奴隷にした。それは基本的に現代まで続いている。

岩波書店 佐原真著「戦争の考古学」より。

cf 現憲法の平和主義と、私有財産権の保障

現憲法の第一章第一条の「象徴天皇制」・第二章第九条の「平和主義」・第三章第二十九条の「私有財産権」の保障には矛盾がある。戦争の原因と結果が対立し矛盾している。戦争の最大の原因である「私有財産」の保障と、「平和主義」が並列しているのだ。

ブルジョア法の限界とも言えるが、現憲法は、戦後の階級闘争の妥協の産物である。また労働者人民が勝ち取ったものでもある。

将来、天皇制と私有財産権を無くした真の労働者人民のための憲法を作る必要があるが、現憲法には、敵階級の最大の弱点がある。憲法九条は、平和主義を明言しており、軍事を本質とする敵階級の脇腹に突き刺さったトゲである。我々は、憲法九条を守る闘いを日本階級闘争の最大の課題として闘わなければならない。

資本主義社会は、人類始まって以来の暴力社会である

資本主義社会では、日常的に一見平和的に見える物のなかにその根底には暴力性が貫かれている。現代帝国主義は人類史上始まって以来の巨大な暴力社会を作り出した。

世界の核弾頭数は1万9000発で前年より1500発減

少した。その内訳は、ロシアが約1万1千発から約1万発へ、アメリカは、約8500発から約8000発へ削減となつていくが、国連で認められている核保有5カ国(米・ロ・英・仏・中)は核の運搬手段ミサイルの命中精度の高度化、多弾頭化、小型化などを進めており核軍縮は全くすすんでいない。

またインド・パキスタン・イスラエル・南アフリカ・北朝鮮と核保有国は拡大している。人類絶滅の危機は、増大しているのである。(2002年ストックホルム国際平和研究所発表)

第2次世界大戦での戦死者の増大

第2次世界大戦では、全世界で数千万人の人が虐殺されている。ナチスドイツは、ゲシュタポがユダヤ人や左翼反対派約600万人以上をガス室などで虐殺した。日本軍は、中国やアジアでの侵略戦争で約2000万人以上を虐殺した。

日本自身では約310万人の民間人・軍人が死亡した。その中で特筆すべきは、沖縄戦であり民間人・軍人併せて約19万人の人が虐殺されたことである。大本営は、戦争の敗北が明らかだったのに、その後も本土決戦を全国民と日本軍に命令した。(天皇制と国体護持のためだ)その結果広島・長崎に原爆が投下され数十万人が一瞬にして虐殺されたのである。現在も多数の被爆者が後遺症と闘っている。

第2次世界大戦と現在の武器の破壊力を比較してみると、核兵器をはじめ数千倍の力を持っている。全面的に使用すれば、人類も生物も滅びてしまう危険な時代なのだ。

現代は、凄まじい戦争と革命の時代である。マルクスもレーニンもグラムシもその惨状を予測も出来なかった時代である。我々は、革命党として世界の人民の前で世界革命の貫徹による恒久平和の実現を約束しなければならない。

革命運動の中から発生するスターリン主義

革命党は、重大な歴史的使命と同時に自覚が無いと避けられない重大な俗物的性格を持っている。革命党員は、資本主義社会で生まれ育ち、教育を受けている。スターリニズムはここを基礎に発生している。革命家には対象の変革と同時に、ブルジョアの俗物性からの自己変革が求められるのである。

スターリン主義は1917年のロシア革命の中で発生した。反革命との激しい闘いにほぼ勝利し、内戦による全社会的疲弊から立ち上がる事が求められていた。

新経済政策・ネップが始まった時期である。ロシア国内の経済を立て直し、農業・農民の問題を解決しカスカフ地域で革命に決起した少数民族の取り扱い、党中央と地方組織(ムス

リムやユダヤ人も多い)の自治を巡る対立や、党の官僚主義的変質という重大な問題があった。レーニンは、問題の重大性に気がついて手紙などで手を打ったが、時、既に遅し1924年1月21日病気で亡くなった。

モツシエ・レビン著(レーニン最後の闘い)が参考になる。

スターリンの権力掌握と「レーニン主義の基礎について」の発行
ロシア共産党書記長だったスターリンは、レーニンの死の直後1924年4月に「レーニン主義の基礎について」を発表。スベルドルフ大学で講演して自分がレーニンの後継者であると宣言した。書記局でかなり周到に準備して作成された内容になっている。

「レーニン主義の基礎について」は、100年近く前の著書だが今日までスターリン主義の原型をなしており簡単に検討する。

主要な内容の項目は、

- プロレタリアートの独裁
- 農民問題
- 民族問題
- 戦略と戦術
- 党 となっている

革命の主体であり主役は、言うまでも無く全人民で組織されたソビエト・コミューンである。革命党は、水先案内人なのだ。

グラムシは、革命党について次のように述べている。

1919年6月21日へオルディネ・ヌオーヴォ
グラムシ選集 5巻15頁より。

「党は共産主義教育の機関、信念の炉、理論の炉であり続けなければならない。この任務を厳格に展開しなければならぬからこそ党は責任や規律の執行に不慣れな新しい加盟者に門戸を開放する訳にいかないのである。」

これはグラムシが1919年と1920年のトリノにおける労働者人民の蜂起的な闘いの中で当時の「社会党」の指導下にいた労働者人民の中から「共産党」を同志トリアッチと共に作ったときに書かれた文書である。革命党形成の独自性と意識性を述べている。

我々の経験から言っても、革命党は、長い闘争の経験(弾圧・内戦・党内闘争など)や理論的水準の高さ、政治路線の確さ、影響力の全国性などが要求される。

革命党員には、共産主義的な自己規制力や自己犠牲・献身性や創造性そして敵からの攻撃を跳ね返して行く気力や

またプロレタリア独裁の任務として

- ① 地主と資本家の反抗を打ち破り根絶やしにする。
- ② 全ての勤労者をプロレタリアートのまわりに結集するように社会を建設する。

③ 外敵・帝国主義と戦うために軍隊を組織すると述べている。またプロレタリア革命の国家形態としてのソビエト権力にも触れている。

これは一見正しいように見える。しかしこれは180度転倒した反革命の意見である。革命党とソビエト・コミューンの関係が逆さまなのだ。党が一方的に労働者人民を指導するとなっている。

今日歴史的に見ればスターリンが、プロレタリア独裁を指導する党の名でスターリン個人の独裁を正当化する布石のような文書である。

全てを革命党がプロレタリア独裁の名の下で、指導すると言い、革命党とソビエト・コミューンの関係を180度転倒させている。ひとつひとつの項目も今日の観点から詳しく検討すれば内容はかなり歪んでいる。第二インター批判のような体裁を取っているが、実際はスターリン個人の反対派排除の意図が見え隠れする文書である。当時のスターリンの政敵は、トロツキーと左派のグループだった。

根性が求められる。へそれは個々人バラバラのものでは無く、党的団結力による力が要求されると言う事だ」

革命党は、あくまで原則的に創らなければならぬ。プロレタリア革命にふさわしい豊かで創造的な内容を持った党綱領と厳格な規律を創りだしてゆかなければならぬ。

これは私の意見だが、革命党は、全国的な中央集権制をとり厳格なプロレタリア民主主義が貫徹されなければならぬと思う。また革命党は、帝国主義の武力弾圧に対して生き残り、敵を打倒しようとするれば、革命党は、本質的に秘密党でなければならぬと思う。

私の約20年間の秘密党活動の経験から感じることは、革命家である限り権力と闘う人間は、誰でも秘密活動をやらなければならぬと言う事だ。問題は、今日の政治的・軍事的状況を党がどう判断するかである。私は今の状況では組織的な秘密党建設は出来無いし、その力量も無いが、公然活動での非公然・非合法の活動をやり抜いて、敵の壊滅攻撃に耐えうる強力な党を作つていかなければならぬと思う。

2度の破防法攻撃を我々は、跳ね返してきたではないか。

革命党の歴史的使命は、帝国主義を打倒しプロレタリア人民の権力（ソビエト・コミュニン）の権力を樹立する指導をすることだが、プロレタリア人民が権力奪取に成功すれば、

基本的に党の役割は終わる。

解りやすく言えば革命党は、へ武装した水先案内人へであり船が、大海に出れば、その階級的役割を終え、政治状況に対応しながら消滅してゆくのだと思う。

革命の実体であり主体なのはソビエト・コミュニンである。

第二章 労働者評議会・ソビエト・コミュニン

オルディネ・ヌオーヴォ 第5巻37頁

労働者民主主義より 1919年6月21日

「地域評議会は、代議員の大集会を開くために選挙の準備にからなければならぬ。そのスローガンは、「職場の全権力を職場委員会へ」であり、さらにこれと並べて「国家の全権力を労働評議会へ」である。党と地域サークルに組織されている共産主義者たちの前には革命の具体的宣伝の広い展望が広がっている。各サークルは各市の党支部と一致して地域のプロレタリアのエネルギーを点検し職場の代議員に地域評議会の場を提供し地域のエネルギーを結集し集中する中核とならなければならない。

選挙の方式、職場の大きさによって様々に変化してもよろうが、部門別に労働者を分けてへイギリスの工場ではそう

している15人に1人のわりで代議員を選出するように務めるべきであろう。このような選挙を段階ごとに行つて労働の総体へ労働者・事務員・技術者への代表を全部含む工場代議員会に達するようにする。

地域委員会にはその地域にすむ他の部門の勤労者すなわち・給仕・車夫・従業者・鉄道員・清掃人夫・商店員・販売員等の代表も含むように努力しなければならない。地域委員会は、その地域に住む全勤労者、階級を中心にしなければならない。

この中心は、合法的で権威を持ち無理なく承認された権力という形で一つの規律を皆に守らせる事が出来、地域全体にわたる直接的、総合的な全労働の停止を命令出来る力を持つていなければならない。地域委員会が拡大すると市委員会になる。これは社会党「革命党」と労働者によって統制され規律つけられる。

このような民主主義へプロレタリア民主主義への体制は、同様な農民組織と総合化して大衆に永続的な規律と形態を与え政治と行政の強大な学校となり、大衆一人残らず抱容して不屈と忍耐の気風を養わせるであろう。そして大衆自身をひとつの軍隊とみなし打倒されて奴隷状態に逆戻りしたく無いならば、この軍隊は、堅固一貫性を持たなければならぬ。

らないと考えるようになるであろう。」

グラムシの革命党に対する意見と労働者評議会に対する意見。

グラムシは、暴力革命を指導し、権力奪取を目指す革命党と、社会の建設を内包している労働者評議会とは階級的役割は区別して論じている。

労働者評議会は全人民性と自己規律性が必要である。従つて統一戦線組織となるが、それを指導するのは革命党である。ここで重要な点は、革命党が労働者評議会が本来持つている自己統治力・自己統治社会を作る能力ソチエタ・レゴラータを無視して一方通行的に指導をおこなえば、党の中に官僚主義が発生し、革命党は、あつと言う間にスターリニスト官僚の集団に転落する。そして労働者評議会は、全人民の支配のための道具になってしまう。

これは、旧ソ連や現在の中国・北朝鮮など階級闘争上の厳しい教訓である。スターリン主義についてはあまりにも多すぎて手にあまるので別の機会に論じたい。

第三章 労働組合

1919年10月11日 オルティネ・ヌオーヴォ

労働組合は、西欧諸国に現存する形態においては、ソビエトとは本質的に違った型の組織であるばかりでなくロシア共産主義共和国の中で発展しているのとは、はつきり違った型の組織である。

個々の経営の労働組合、地方労働者協議会、産業別労働組織、労働総同盟これらは特殊な資本が制圧していた時代の型のプロレタリア組織である。ある意味ではそれは資本主義社会の補完物であると主張する事もできる。それは私有財産制度に内在する一機能を持つていたのである。

この時期には個人は、商品の所有者であり自分の商品を商うかぎりにおいて価値を持つのだが、労働者もまた一般的必然性の鉄則に従わぬわけにはゆかず唯一の所有物すなわち労働力と専門知識を売るものとなったのである。

そして競争の危険に晒されれば晒されるほど危険は、増して行く。労働組合の本質的性格は、競争主義的であつて共産主義的では無いのである。労働組合は、社会の根本的革新の道具となることは出来ない。

労働組合は、個人に基礎をおいている。それにたいして評

議会は、職種という有機的で具体的な単位、産業過程の規律の発展構造の中に実現する単位に基礎をおいているのである。分担、職種の中で人はこの単位が、等質的な一体としての階級と運命を共にしていると感ずる。評議会が存在する事によつて労働組合の労働者には直接に生産の責任が生じる。

今まで生産管理の責任は資本家が担っていた。労働者はその労働を改善し意識的・意志的秩序をたて生産者の心理、歴史創造者の心理を作り出さねばならなくなる。労働者は労働組合の中にこの新しい意識を持ち込み労働組合は単なる階級闘争の活動を離れて経済生活と労働技術に新しい形態を刻印するという根本的仕事に専念する。共産主義文明にふさわしい経済生活と専門技術の練り上げる事に専念するのである。

この意味では、労働組合は最良の最も意識の高い労働者によつて構成され階級闘争とプロレタリア独裁の最高の段階を実現するのである。つまり労働組合は、階級というものが存在しなくなり再生する事も出来なくなるような客観条件を作り出すのである。

グラムシの革命党論と労働者評議会論そして労働組合論についての理論は、非常に明快であり、階級闘争上の役割の

違いと密接な関係を述べている。

革命党については、ブルジョアジーとの権力闘争を担う敵選された人材から党员を選出すべきであり、豊富な経験と確かな判断力、マルクス主義の理論的水準の高さなどを求めている。すなわち職業革命家・プロフェッショナルな組織の建設をもとめている。

その内容は、スターリン主義のような間違つた前衛主義・エリート主義とは180度違うもので、自己犠牲や他人との共同意識や抑圧された人間に対する深い愛情や平等精神が根底にある。グラムシが、重視しているのは、労働者評議会(ソビエト・コミューン)である。

工場評議会は、労働組合の経済闘争や労働環境全般を巡る闘争を指導するとともに生産管理というこれまで資本家が担ってきた仕事全般を担うのである。物資の調達生産物の配布(販売)1919年〜1920年トリノでは、警察・軍隊の軍事的介入に対して武器の生産も行った。この工場評議会は、地区評議会の最重要な基礎になる組織である。これは、(ソチエタ・レゴラータ)自己統治社会の実現である。

地区評議会は、工場評議会・農村評議会・兵士評議会・学生評議会その他ありとあらゆる各種評議会の全国的連合を形成し、プロレタリア人民の国家を形成するのである。ブル

ジョア国家との権力闘争は、不可避であり、地区評議会の全国性や力量が問われる。

第四章 グラムシのヘゲモニー論

グラムシのヘゲモニー論は、被支配階級である労働者人民とブルジョア支配階級の間で階級支配のために行われる権力闘争と社会建設の展望を巡る争いの事であり、社会の全領域にわたる主導権争いの事である。どちらが社会建設上の展望を人民に示し同意を得て実行することができるかを争うものであり、社会の全領域を隅々まで貫徹する支配階級のヘゲモニーに対する労働者人民のカウンターヘゲモニーの闘いである。日常的で現実的な闘いなのだ。ヘゲモニーを巡る闘争は、軍事問題に始まり政治・経済・労働者人民の社会生活全般にわたっている。

自衛隊の海外派兵を巡る問題、警察の治安弾圧を巡る問題、中央や地方の官僚の汚職や腐敗の問題、アベノミックスの失敗による労働者人民の貧困化と格差の社会全領域での拡大、失業者や非正規労働者の増大、教育費の増大による学生の貧困化、教育現場への国家主義的「日の丸・君が代」の導入と強制、社会全体への天皇制イデオロギーへの屈服の要

求(自民党改憲草案では、天皇は国家元首にすると云っている)。零細農業・漁業・林業などへの圧迫、(TPPへの参加の強行)。原発再稼働への動き。マスコミの持つ強力な労働者人民に対する宣伝・扇動の力の利用。地方・中央の議会での多数派の形成。そして憲法改悪へ突き進んでいる。

こうした攻撃で日本帝国主義安倍政権は、「集団的自衛権」を確保し戦争への道を通走っている。沖縄における辺野古への米海兵隊の基地強行建設は、その頂点である。日本の軍事国家に向けて日本階級闘争のヘゲモニーを取らんとする安倍の戦略である。これに対して我々労働者人民は、強力な労働者人民のカウンターヘゲモニーの装置を作り出して行かなければならない。

先ず何よりも沖縄現地の島ぐるみの闘いと連帯する闘いを本土で作る事が重要だと思ふ。沖縄では現に日本革命を展望出来る階級闘争の火柱が上がっているのだ。

我々が現在闘っている闘争は、日本革命を巡る日本帝国主義安倍政権の戦争政策とのヘゲモニー争いであり、革命運動そのものである。空自京都経ヶ岬分屯基地への米軍Xバンドレーダー基地建設に対する住民・支援者の闘い、原子力発電所再稼働阻止の闘い、国民の差別分断支配に対する闘い(女性解放闘争・障がい者解放闘争・入管闘争・部落解放闘

争・ヘイト・スピーチに対する闘い・被爆者解放闘争・アイヌ解放闘争など)

重要な闘いは、労働戦線である。関西合同労組は、その他の労組と連帯する闘いを行っている。失業者や非正規労働者の生活と権利を守る闘いを指導し、裁判闘争・デモなどを実施している。地域の各種要求を受けて行政闘争を行っている。また組合以外の政治闘争に積極的に参加して労働者人民の革命への意識と団結力を培っている。

50年間闘っている三里塚闘争は、安倍政権の脇腹に突き刺さったトゲである。三里農民の土地取り上げに対する怒りと苦しみの中で、今日まで闘い抜いてきている。日本の農民運動の展望を切り開かんとしている。

ヘゲモニー戦で最も重要な闘いは、軍事的な視点である。イタリアでファシスト党は、左翼に対する闘いでは、暴力を先行させヘゲモニーを奪取した。

1924年のローマ進軍ではファシスト党の私設軍隊である黒シャツ隊を使って左派や反対派への襲撃を繰り返しながら、バチカンも屈服させ中央権力を奪取したのである。その後ムッソリーニ政権は、1924年に社会党・党首マッテオッティの暗殺で、危機になるが、ファシストを政権から叩き出す

第五章 反軍闘争の重要性

安倍政権は、「集団的自衛権」を確保して海外派兵を強行しようとしている。また「駆けつけ警護」で他国の戦争に自衛隊の判断で介入も行うとしている。南スーダンでは、内戦が激しくなっている。派遣された陸上自衛隊のPKO部隊350名が派兵されているが、政府はすぐに「PKO参加五原則が崩れたとは考えていない」(菅義偉官房長官)と政府見解を発表した。実情とは全くかけ離れた見解であり、いつ自衛隊が攻撃されたり、また反撃したりする戦争状態になるか分からない危険な状況である。

これは戦争の担い手である自衛隊員に次の事を要求する。一つは、何のために戦争をやらされようしているのか。

日本の「国益」のためと言うが侵略戦争ではないのか。一部の資本家の利益のための戦争ではないのかという疑問が必然的にわいてくる。「人を殺すのか、自分が殺されるのか」負傷した場合自分自身の人生はどうなるのだ。国は保障してくれるのか、クエートで負傷した池田元航空自衛官は、名古屋地裁で損害賠償を求め裁判中である。このような事が究極的に問われるのだ。

これは日本帝国主義安倍政権の侵略戦争政策を巡り自

絶好のチャンスだったが、左派が統一戦線に失敗し真相究明が出来無かった。ヘゲモニー戦の敗北である。ファシストの暴力に屈服したのだ。

その後ファシスト党は、南部イタリアの社会党系農民や、全国の社会党の事務所、左翼の工場労働者などを繰り返し襲撃しファシズム政権の基礎を固めようとした。ヘゲモニー戦の内容を作るために農村ファシズム運動、女性ファシズム運動、青年ファシズム運動、軍隊や官僚組織にファシズム運動を起こした。

ファシスト労働組合を作り左派に対抗しようとした。その思想は、「コーポラティズム」である。これは労資関係や福祉活動・社会活動に国家が介入し調停しようとする政策である。この政策は、1945年ファシスト政権が崩壊するまでなんと約20年間も続いたのだ。左派の勢力が、ファシストとのヘゲモニー戦に対抗出来無かった事をしめしている。コーポラティズムは、今日北欧などの福祉国家政策として生き残っている。

衛隊の中で賛成派と反対派の自衛隊員の確保を目指すヘゲモニー戦である。これは自衛隊員の家族、友人、支援者、元自衛官を巻き込んだ闘いとなる。自衛隊基地への包囲やデモ、申し入れ行動、裁判闘争、などがあるが、最も重要な闘いは自衛隊員への秘密オルグである。この闘いは秘密の革命党が必要だ。

我々は、1969年、小西誠三等空曹が、佐渡の空自分屯基地で決起して以来、47年間反軍闘争を闘ってきた。また1972年4月28日沖縄闘争に、小多基美夫3等空士他陸自の4名が決起した。他市ヶ谷基地などで自衛隊員自身が立ち上がっている。このような軍事問題を直接的対象とする闘いは、日本革命の帰趨を決める闘いとなる。

現在自衛隊は、軍制改革を実施中である。明治10年の西南戦争直後から始まった「山県有朋」の軍制改革に匹敵するものだ。それは、地域を防衛する「鎮台」から海外派兵が可能となる「師団」への改変である。旧日本軍は、侵略戦争のための軍隊を完成させた。

自衛隊は、アジア・中東を対象にして全体を北方重視(対ソ戦)から西方重視(対中国やアジア全域)へ転換し、戦車や重火器を減らして、「西部方面普通科連隊」には、米海兵隊のような装備と機能を持たせ猛訓練を行っており、自殺者

が多発している。第一空挺団や第12空中機動旅団を重視し、足の速い軽快な部隊を作りすぐに戦争出来る部隊へと改変がすすんでいる。

ロシア革命においては、1917年2月のケレンスキー内閣に対して8月コルニロフ将軍が、反乱を起こし対独戦を継続しようとしたが、戦争に行きたくない兵士の反乱により崩壊し、兵士はヴォルシェヴィキが指導する革命派へ移行、10月革命勝利の軍事的基礎を切り開いた。これは、厭戦気分が蔓延する兵士に対する反軍闘争でのヘゲモニー戦の勝利である。

レーニンは、1905年の蜂起を総括し「モスクワ蜂起の教訓」で武装蜂起の準備をする事、蜂起は、慎重に時期を見極める事、「1日早くても1日遅くてもいけない」と言っている。レーニンの政治的・軍事的指導の確かさがあり、敵階級の軍事を崩壊させ無力化し、軍隊を獲得出来、革命に勝利したのだ。この歴史的教訓は重大で、日本階級闘争におけるヘゲモニー戦の参考になる。

日本におけるヘゲモニーの闘いは、天皇制と天皇制イデオロギーとの闘いが重大である。これは日本の資本家・軍部・高級官僚などの帝国主義の支配者どもが、国内での労働者人民に対する階級支配や侵略戦争を行うにあたり必要不可

欠な、体制であり、イデオロギーである。天皇制や天皇制イデオロギーの労働者人民に対する吸引力や制圧力は、強力なものがあり、我々は、この闘いに基本的にいまだ勝利していない。

1945年日本の敗戦は、日本革命のチャンスを迎えたが、マッカーサー・GHQの戦後政策で、(天皇制)を利用し、生き残した、日本の戦後革命は不貫徹で終わった。

「日本国憲法」は、平和主義・基本的人権・主権在民・罪刑法定主義などがあるが、「象徴天皇」「私有財産権」を認めており、日本革命の観点から見れば中途半端なものだ。

しかし憲法9条は、戦争政策を推し進める安倍政権の脇腹に刺さったトゲになっている。だから我々は9条を守る闘いが重要だが、安倍の戦略が次の点に有る事を見る必要がある。

現「日本国憲法」は「主権在民」を銘記し、国民が国家を縛り点検出来る権利があるのに対して2012年の自民党の「日本国憲法改正草案」では、国民は国家にたいし義務を負う内容になっている。この考え方は、「大日本帝国憲法」と全く同じだ。

2016年7月13日参院選の結果は、野党4党の統一戦線が、大敗し自公政権が3分の2の議席を確保した。衆院と

参院で議席の3分の2を確保し憲法改悪を決議出来る情勢となった。安倍政権は、「緊急事態条項」を持ち出してくるだろう。これは、1930年代にナチスがドイツ国会で成立させた「全権委任法」の時とおなじような状況である。

行政府の権限が増大する。特に軍隊・警察・内務官僚が、悪法を乱発し、それを国会が追認的に合法性を与え国民に強要する。これは戦後の議会制民主主義の崩壊であり、安倍の戦争政策を、国会では、阻止出来無くなった事を意味する。

結論

現代の階級闘争におけるヘゲモニー戦は、世界的規模を持つており、社会の隅々にゆきわたっており、支配階級のヘゲモニー装置は、巨大で巧妙さをもっており、労働者人民の日常生活にとつて必要不可欠な装置であるかのような幻想さえ生まれている。

巨大な軍隊や警察・膨れあがり腐りきった巨大な官僚組織・マスコミを使った全人民に対する宣伝・扇動。天皇制と天皇制イデオロギーによる人民支配、宗教による人民のイデオロギー支配、教育の反動化と戦争教育化、学生の経済的疲弊、社会福祉政策の後退、将来年金資金の食い潰し、度重な

る災害に対するボランティアへの国家権力の介入と統制、教科書などにみられる国家主義的傾向、オリンピックなど対外競技のマスコミを使った異様な賞賛、ヘイト・スピーチは、根絶されていないし、何時でも復活する、中小農業・魚業・林業民の切り捨て、原発再稼働、辺野古へ米海兵隊の新基地建設強行。今参院選における与党が議席数の3分の2を確保し憲法9条の改悪を狙っている。

この状況の背後には、日本を戦争に巻き込まんとする、国際金融資本(実体経済の4倍以上となった架空資本)や日米両国家の巨大な軍事力の存在が有ることは、間違いない。彼らは、政治・経済・軍事的危機を迎え生きるか死ぬかかけたヘゲモニー戦に打って出てきたのだ。

1930年代ナチスドイツは、「全権委任法」を成立させ「国会」を行政の追認機関にし、ワイマル憲法を無内容化した。その結果戦争とユダヤ人虐殺は、さけられなかった。

安倍政権は、参院選での3分の2の議席を確保し、「緊急事態条項」を持ち出してくる事は、間違いない。これは、警察を先頭に行政機関が国民を縛るといふ法律だ。

目的は、憲法を改悪し、国家緊急権(戒厳令)の権限を軍に付与し日本全土を戦争国家にすることである。戦争に向かつて恐るべき事態が、進行している。我々労働者人民は、これ

に対しカウンターヘゲモニーの闘いを実施している。全国各地で様々な闘いが展開されている。

沖縄の島ぐるみの闘いを先頭に、京都府京丹後市の経ヶ岬分屯基地に、米軍のXバンドレーダー建設強行に反対する闘い。佐世保・横須賀・厚木・岩国など本土の米軍基地に対する闘い。自衛隊の海外派兵に反対する反軍闘争。原発再稼働反対の闘い。TPPなどの中小農業。漁業。林業に対する抹殺攻撃に対する闘い。学生の貧困化、学生間の格差の拡大。労働者人民の失業者の増大、非正規労働者の増大。排外主義との闘い。部落差別・女性差別・障害者差別・被爆者差別との闘いがある。

また地方と中央での議員選挙は、先進資本主義社会では、ヘゲモニー戦の最大の闘いである。グラムシは、資本主義の危機回避には必ず議会が登場すると言っている。

敵階級とのヘゲモニー戦で重要な事は、闘い方・種類・地域また思想によつて異なる労働者人民の運動を、どうしたら中央におけるヘゲモニー戦を勝利へ導く全国的なカウンターヘゲモニー装置を作り勝利出来るのかと言う点である。現状ではなかなか困難だが、唯一勝利したロシア革命が参考になるだろう。

ヘゲモニー戦の勝利は、全人民の同意なくしては出来無

い。つまり階級闘争のありとあらゆる場所と部門で統一戦線を必要としており、将来、労働者人民の評議会・ソビエト・コミューン形成を展望出来る創造的組織形成が必要不可欠である。それには真の革命党の組織的関与と指導が必要である。

今日の科学技術の発達により情報は、瞬時に全世界に伝わる。世界の政治的・軍事的・経済的危機の中で、労働者人民は、抗議闘争に何百万何千万という人が街頭に進出する。

この情勢は、権力闘争を孕んでいるが、生産活動を担う労働者人民のゼネストと結合し、革命情勢を作り出す。ブルジョアジーとプロレタリアートの国家権力を巡る闘いは、頂点を迎えるのだ。現在は、その直前だが、日本では、改憲闘争と本格的戦争突入が切っ掛けになるだろうと思う。

1965年11月、革共同機関誌「共産主義者」13号

「イタリアマルクス主義批判」グラムシのヘゲモニー論より

プロレタリアートがその独裁を樹立し、それを維持することとはその国民的階級への形成ヘゲモニーのための闘争と全く同一のことである。またプロレタリア独裁という目標から逆限定されたプロレタリアの現在の闘争である。

共産主義者は、労働者階級の直接当面する目的や利益のために闘う。だが共産主義者は、現在の運動の中にあつて、同時に運動の未来を代表する。(共産党宣言)

グラムシの国家論は、けつして「民主主義」「議会主義」「平和主義」の物神化とは関係無いばかりか同じ階級支配の「二つの仕方」のあらわれ」としてとらえられている。にもかかわらずその国家論は、「力と同意」「権威とヘゲモニー」「暴力と文明」「独裁とヘゲモニー」といった機能的政治的な把握から一歩も出ていないから、このそれぞれを分離して把握することを可能とし、トリアッチ主義者によつてきわめてプラグマティックに「構造改良」路線の「理論的」支柱に利用されている。もちろんそのことはグラムシ国家論の歪曲的理解をも必然化させずにはおかない。

第六章 マルクス主義国家論とは何か

① 従来の国家論

ブルジョア社会では、すべての市民は、「公人」と「私人」との自己分裂に陥りその対象的表現としての国家を「公のもの」、自己を「私なるもの」としてみだし自らを組織する。利己的なものとしての「私人」は、国家を媒介にしてはじめて「公

人」として見いだす。または、「私人」としての自己は、「公人」としての自己を「国家」にみいだすことによって「国家」を容認し「国家」を強化する。このことは、組織された武装部隊に対して一般の市民、国民は、原子化され細分化され抽象化されること、つまりプロレタリアートは、自らを階級として組織しえないことを意味する。

「私人」「私利私害」「特殊利害」でしかない抽象的な原子化された市民、人民、国民は、国家によって自己を組織化するものであるが、このことは国家が、「抽象的」「一般的」「共同的」「公共的」なものとして見なされることによってである。国家が国家たりうるのは、自らを「共同性の幻想」「幻想の共同体」として存在するが故である。

国家がこのように「幻想的共同体」であるがゆえに国家は、武装部隊たりうるばかりか暴力的たりうるのである。

ブルジョアジーは、自らをそのようなものとして「合法的」と感じ、ブルジョア支配を「合法的」と感じる国民の一定部分を武装部隊として組織・編成し、大多数の国民を「合法的」に支配するのである。それ故に武装部隊は、必ずしも国家ではない。こうした幻想は、資本制生産様式からたえず立ちのぼってくる。

資本制生産様式を唯一の永久的な普遍的な社会的生産

まり「市民社会のヘゲモニー装置」(教会・学校・組合・アソシエーション・マス・メディア・政党・企業など)分節・接合しうる「国家概念の刷新・拡張」へと、前述の「ヘゲモニー概念の刷新・拡張」は内在的に連動し、さらにこの国家概念の刷新・拡張を媒介としつつヘゲモニー・ヘゲモニー装置論がより豊富化されてゆくのである。

国家と市民社会 二六頁

グラムシは二重の意味で「国家概念の刷新・拡張」を図っている。その第一は、前述したヘゲモニー概念の刷新・拡張と連動しつつ、国家を強制的支配機構に還元せず、官僚的強制的機構に支えられた支配的社会集団の政治的かつ知的・道徳的指導の複合的総体として把握することで、政治社会(狭義の国家)＝強制(強力)的支配と服従、市民社会(広義の国家)＝指導と同意(説得)の両契機を動的に把握することを可能にした。

「国家とは指導階級がそれによって自己の支配を正当化し維持するのみならず、被統治者から能動的同意を獲得することを可能とする実践的および理論的活動の総体」という草稿に明瞭に、示されている。

第二には、以上のような国家概念の刷新・拡張は「政治社

と感ずる資本制生産様式の物神化、労働者が労働力商品であることを「自由」「平等」「功利」と感ずることのなから、資本と賃労働の「運命共同体」「企業防衛」「民族共同体」「祖国防衛」などのイデオロギーが、たえず立ちのぼってくる。この「共同体の幻想」の強化は、この社会的生産様式をイデオロギー的にも実体的にもたえず強化するものとなる。

支配階級の思想は、どの時代でも支配的思想である。国家に対する「幻想」「同意」を生産し、国民を「組織し結合する要素」(グラムシ)としての「ヘゲモニー」とは「独裁」の別名に他ならず、それ故に「ヘゲモニー」の強化とは、一層、暴力的たりうることである。

「ヘゲモニー装置」の最も安定した様式、それが民主主義制度であり、「同意」を組織するための「世論」制度でもある。

② グラムシの国家論に踏まえた、現在の我々の国家論。

展開「二四頁より

国家を単なる強制的支配の機構つまり「暴力装置」でのみ一面的に単純化して把握するのでは無く、国家ヘゲモニー装置(議会をはじめとする三権分立制や公教育制度など)および「市民社会の諸要素」によって体现される塹壕や要塞「

会の市民社会の再吸収」を理論的に可能にする。つまり「国家の死滅」論を超えて「国家」強制の要素は、ソチエタ・レゴラータ(自己規律的社会あるいは倫理的國家ないし市民社会)の要素が顕著なつてゆくにつれて、ますます衰退してゆくという国家観を導きます。

第七章 構造改良論の批判

アントニオ・グラムシの最大の友人で、同志であったパルミロ・トリアッチを批判する場合、彼がイタリアの敗戦前後にコミンテルンの国際部からイタリアに派遣され、パルチザン戦争を指導したという事実から出発すべきである。当時の状況ではやむをえなかつたと思うが、占領軍であった連合軍(米英軍)のイタリア占領を受け入れたところから彼の戦後の政策は、立案され、実行され、理論化されたものである。

つまり第二次世界大戦は、連合国、民主主義国(米・英・仏・中・ソ)対、枢軸国・独裁国(日・独・伊)の戦いに勝利したという認識から出発している。第二次世界大戦は、帝国主義国がスターリン主義国を巻き込んだ帝国主義間争闘戦である。米軍は、イタリア解放軍であるという認識を土台にし

てトリアッチの構造的改良論は組み立てられている。武器や財政で支援を受けたとは言え、米軍はイタリア占領軍である。

トリアッチの構造的改良論批判

トリアッチの構造的改良論は、グラムシの「社会主義へのイタリアの道」を次のようなものとして提起している。「我々は、民主主義者である。何故なら我々、憲法、民主主義的習慣および憲法の定める法秩序の範囲内で行動しているからであり、すべての人にこの法秩序を尊重する事を要求し、全ての人の側から、なによりもまず為政の側から憲法のあらゆる基準が実行される事を要求しているからである。」(「社会主義、民主主義」事実、社会主義前進の道が民主主義の領域で可能であるばかりか、議会の諸形態を利用する事によっても可能である。

現在の条件のもとにありながらも勤労者と中産階級に有利な経済政策、を押し付けるために、これらの改良のスローガンとこれまでの鋭い革命的危機にさいして掲げられるべき、もっぱら権力をめざす闘争へ向かつて国民大衆を指導するためのスローガンを混同するのは誤りであろう。構造的改良は、絶対的目標であり、政治闘争の現在の条件の中で実現

する事の出来る絶対的な目標である。構改派が、このトリアッチの提起を理論つけるマルクス主義国家論を歪曲して、その場合グラムシを採用して次のように言っている。

国家には「階級的暴力的機能」の側面と「社会的行政的機能」の側面との、または、「機能性」と「公共性」との二つの側面があると。但しグラムシの「独裁十ヘゲモニー」は明確な階級的なものとして提起されている。たとえばジェルラターナによればこの二つの側面のうち、国家の正当な機能である「社会的行政的機能」「公共性」の側面が現代の国家においてますます増大していると。

彼等は、国家の機能を二つに切り離し、プロレタリアートが「公共性」を制限してゆく過程(議会による立法化)が社会主義への「構造改良」であり、「国家機構の破壊は必ずしも必要ない。」とする。

たしかに社会法、労働法の領域の拡大、財政政策や公共事業の拡大など、国家独占資本主義の段階では、いわゆる「行政的機能」の役割は増大している。この事は国家が独占資本総体の利益を守るための努力を意味するだけである。しかも経済危機の深化、市場争奪戦の激化は、ますますそうした資本の安定のための見せかけの損の無譲歩すらブルジョアジーには不可能になりつつある。つまり公共事業、福祉事

業、財政政策は、独占資本の搾取と収奪の手段にますます転嫁するのである。(公共料金の値上げ公債発行など)こうして国家とプロレタリア人民との間にはますます対立が激化してゆくことになる。こうしたことが不可避なのは国家の「公共性」の性格が本来的に階級的なものであるからである。

つまり国家の「社会的行政的機能の増大」とは、その「階級的機能」の増大であり、本質的には国家という「共同性の幻想」が一層強化される事を意味する。「共同性の幻想」の強化は、ますます国家が暴力的たりうる事、その「万能化」「強化」に他ならないからである。

このことをマルクスは、その小冊子で、次のように述べた「すべて共通の利害は、直ちに社会から離されより高い一般利害として社会に對置せられ社会の成員の自主活動からもぎとられ、統治活動の対象にされた村の橋、校舎、公有財産から、フランスの鉄道、国有財産、国立大学にいたるまですべてそうだった。(ブリュメール十八日)国家の公共性はいかなる手段によって行われるのか、議会主義的手段によってである。

労働者大衆の自己を政治的存在たらしめようとするやみがたい衝動は、その合法的な形態である議会と投票に向

かうのである。なぜなら議会と投票という民主主義の形態はブルジョア社会で諸利害が全国的な唯一の形態であるから。労働者人民は、それ自身として政治的であるにもかかわらず、合法的に政治的であることを認められているのは、投票行為であり、投票だけである。だから投票は労働者人民が、「政治的」であり「立法者」「執行者」であることの幻想である。ブルジョア民主主義は、ある程度「根源的な人民の要求に對して幻想的な満足にあたえている。

こうして国家の「公共的機能」の拡大、議会によるその促進と言う事は、本質的には労働者人民の行動に對してと言う事である。たとえ労働者人民の「大衆的行動をつよめつ」と言う事をいくら強調しても、大衆的行動ソビエトが主体では無くブルジョア国家が主体であり、大衆的行動は国家に對する圧力であり補足であり誓願でしか無い。それは労働者階級人民にとつて自己が手段化され国家の行動が目的化されている状態を意味する。

我々の革命的議会主義は、このような議会主義とは無縁である。プロレタリア革命運動、ヘゲモニーのための闘争を有利にするために提起されている。議会を重視し、幻想を持つたまの部分も含めて自己を政治的たらしめようとする労

働者人民の衝動と意志に介入し、そうした衝動と意志が、自らの行動と経験をとうしてその限界を乗り越えて前進しうるように指導し大衆の一票一票を現実の反乱(議会とその幻想の破壊)の契機として組織するのである。

マルクス・エンゲルス・レーニンは、ブルジョア国家機関は、社会主義社会の建設に利用する事が出来無い、労働者階級自体が指導する国家機関にとつてかわらなければならぬとした。

CF 構造改良論による議会主義的政策は、国家独占資本主義の持つ基本的矛盾を、国会やその他の議会で解決出来るとする反マルクス主義的思想であるが、その政策の結果は、重大である。労働者人民の国家制民主主義への幻想を強化し、国家そのものを強化してゆく。また根本的な問題は革命の主体が、労働者人民ソビエト・コミューンに有るのでは無く、国家にあると言う事である。構造改良論は右翼スターリン主義である。

第八章 サバルタンとは何か

サバルタンとは、ポストコロニアル理論などの分野において用いられる、ヘゲモニーを握る権力構造から社会的、政治

的、地理的に疎外された人々をさす術語。日本では「従属的社会集団」などと訳されることがある。

イタリヤのマルクス主義の思想家であったアントニオ・グラムシの業績に由来し、南アジア史における非エリート階層の役割に注目した南アジア史研究者たちのグループ、の業績からポストコロニアル理論に導入されたものである。

1970年代にはこの術語は植民地統治下におかれた南アジア大陸(インド亜大陸)今日では、歴史学・人類学・社会学・人文地理学・文学において常用される術語となっている。ウイキペディアより

世界革命という観点から見てサバルタンという概念は現在の世界の情勢を分析しようとするれば重要な概念であると言える。現代は、欧米・日本・中国などの巨大な金融資本による新しい型の全世界の植民地化とも言える(グローバルゼーション)の中で、サバルタンの反乱が起り始めた時代と見ることが出来る。

サバルタンの実際の姿や闘いは、真実の姿が見えにくくなつていと思う。1960年代のベトナム戦争や、アジア・アフリカ地域での民族独立が成功していた時代とはかなり様相が違つてきているようにみえる。それは先進国と旧植民地国

の対立がより深刻になり複雑化して打つ手が無くなつた特権的な支配階級(巨大な金融資本)は、でたらめな世界の暴力を背景にしたイデオロギー支配をやり始めたのだと思う。今日起こっている戦争やテロの本質的原因が、宗教対宗教・民族対民族・地域対地域の利害関係を巡る争いであるかのようなウソの幻想がマスコミを使って世界中にばら撒かれているのだ。世界の労働者人民と連帯した真のサバルタン運動を歪めようとしている。これは世界革命と直結する運動なので支配階級は、死よりも恐れているのだ。

シリア・イラク・北部アフリカなどへのIS(イスラム国家)の台頭やアフガニスタン・パキスタンでのタリバン運動、など同じような運動が、イスラム圏を中心に全世界的拡がりを見せている。

その特徴は、無差別に労働者人民をテロの対象とする事を重要な戦術にし、完全に間違つた自分に都合がいいイスラム教の解釈による自己正当化と人民への押しつけなどをやっている。このような戦いはサバルタンの解放闘争とは無縁でありむしろ、サバルタン自身を危機に追い込んでいる。

世界の帝国主義者達は、労働者人民にテロの危険を煽り制圧し軍事力・警察力を強化している。テロの残酷な結果を一方的に労働者人民は、見せつけられ同意をせまられるの

だ。帝国主義者達が植民地や自国で行っているその数十数百倍の残忍で非人道的行為は隠されたままである。支配階級は、「テロ対策」と言えば何でも出来るという世論を作ろうとしている。サバルタンを含む全世界の労働者人民を暴力的に支配する口実にしている。

何故このような事態になつてしまったのか。それはグローバルゼーションが引き起こした世界的な凄まじい矛盾(戦争・六千万人を超える難民の発生・差別・抑圧・分断・大量虐殺・10億人以上の飢え)に対して、世界の労働者人民者が、権力闘争的な意味でも、社会建設的な意味でも、有効性のあるカウンターヘゲモニー装置を持たず、正しい闘いが出来ないと言う事だろうと思う。つまり世界の労働者人民は、レーニンが指導した世界革命のコミンテルンの現代版のような組織を必要としているのだ。

それは先にも述べたように革命党であり、ソビエト・コミューンであり、労働組合であり、各種市民運動である。サバルタン運動は、その中に位置付けられて真の力を発揮するのだと思う。巨大な世界的な労働者人民の大衆運動・ストライキの爆発・数千万人民の街頭制圧の中でサバルタン集団の闘いは、権力闘争的・社会建設的展望を見出す事が出来るのだ。

支配階級の歴史とサバルタン(従属的諸階級)の歴史

サバルタン諸階級の歴史は必然的に、断片的かつエピソード的である。これら諸階級の活動には、たとえ一時的なものにせよ統一に向けた傾向が存在するが、それは表面化しない部分であり、勝利を獲得した場合にのみ顕在化するものである。サバルタン諸階級は、支配階級のインシアティブの影響を受けておりそれは、反乱の場合でも同様である。つまり彼らは不安定な受動的状態にあるのである。従って自律的インシアティブのいかなる痕跡もきわめて大きな価値を有する。

それゆえ「恒久的」な勝利のみが、それは即刻のものではないが、従属性を打破するのである。実際サバルタン諸集団が勝利しているように見える場合においても、これら諸集団は、不安定な受動的状態におかれているにすぎないのである。(この真実は、少なくとも1830年までのフランス大革命の歴史によって論証しうる)。

「立命館産業社会論集」グラムシにおけるサバルタン論の生成に関する覚書 2003年 著者 松田博

サバルタン論の現代革命論における意味

「7,7自己批判」と「血債の思想」

「血債の思想」は現代帝国主義日本の中で闘う労働者人民

以前の問題だ。当時「華青闘」が我々に問いかけてきたのは、大量の逮捕者(1969年の一年で約2万人)や負傷者、死者を出して闘っている日本の最左翼の闘いは、連帯して闘う相手として信頼できるのか。日本帝国主義が中国・朝鮮・アジアで行った大規模な侵略戦争の結果、数千万人のアジア人民が虐殺され、社会が破壊された事をどう思っているのかと言う事だったと思う。

我々は、それに真正面から誠実に対応しなければ革命党としては完全に失格である。我々は、戦前も今日も日本帝国主義の中で闘う労働者人民が敗北し、侵略戦争を阻止出来ず動員されていた事実をしつかりと見つめ階級闘争を指導する革命党として自己批判を貫徹する必要がある。

次に侵略する側の労働者人民の立っている階級的立場と、侵略される側の労働者人民の階級的立場は、180度違うと言う事を明らかにしなければならない。自己の階級的立場性を明らかにしなければ自己批判の責任も明らかにならない。

当時の共産党のように自分達は「戦前は、日本帝国主義の侵略戦争に反対して闘った。その結果、指導部の宮本顕二氏は18年間獄中闘争を行った」と主張していたが、当時軍国主義の時代を考えればその事は立派だとは思いますが、革命党

の革命論の深化発展にとって決定的とも言える革命思想である。

7・7自己批判とは、1970年7月7日、東京での党派や諸団体の統一戦線の会議で、中国人留学生(東大、大学院生)の闘争組織である「華青闘」の代表「リュウ・サイピン」さんが我々の意見に反対して「退席する」と発言したのに対し、我が党の同志が「いいじゃないか」と発言した。その事に対して我が党が自己批判したことである。(どうせ毛沢東主義者だ。関係無いという態度だった)

私は、1969年の11月決戦で逮捕されて当時獄中において裁判闘争で頭が一杯で、全国全共闘第3軍団のリーダーとして多少怪我をしたけれども闘争をやりきったぞと張り切っていた。1年後10月に出獄した時、党内では厳しい論議が、と言うよりは大騒ぎだった。たしか党の機関紙「前進」506号論文を読んで考えたが、よく解らなかつた。

恥ずかしいことだが、今日問題になっている「サバルタン」の存在を一切無視してとにかく沖縄奪還闘争、ベトナム侵略戦争加担反対、大学闘争勝利の闘いで世界革命に向かって前進しようと思つて闘つていたと思う。アジア人民の闘いと連帯していると思つていた。党全体が、中国やアジアの人民から何を糾弾されたのか解らなかつたのだ。毛沢東主義を批判する

としての使命や責任から言つて階級闘争に敗北した重い責任をどう取るのかから出発するしかない。共産党は当時の敗北の状況を明らかにし共産主義者としての根底からの自己批判から出発すべきだった。我々の旧指導部は、ほとんど共産党出身でありその体質を色濃く持っている。共産党は、結局自己批判は出来無かつた。

革命党は第2次世界大戦の悲惨な結果から目をそらしてはいけない。世界革命の敗北を認める事が重要だ。

マルクス主義の理論的指導者で哲学者であつた梅本克己さんは、彼の「主体性論」の中で共産党は、敗戦に至つた無残な戦争を阻止出来無かつた事を心の底から自己批判しゼロから出直すべきだと厳しく批判している。そのとおりだ。

1970年7月7日の件での我が党の自己批判は、我が党が様々な民族や様々な社会差別の現実を正面から見据えて正しく対象化して真の世界革命を指導するための党形成の出発点を切り開いたのである。サバルタン運動との連帯の道を切り開いたのである。

血債の思想について

この言葉は、説明なしに聞いたらそのトーンの強さにおどろいてしまうが、現代帝国主義が行っている戦争や各種の差

別政策、人民虐殺というなかで考えてみれば、帝国主義国の中で闘う労働者人民に向けられたメッセージのように思う。それぞれの人がおかれた階級的立場を、自覚しないと解らない言葉である。抑圧され差別され社会から排除された人間サバルタンの凄惨な怒りが爆発した言葉だと感じる。

共産主義者の立場でしっかりと受け止め、学び我々の行くべき道を定める必要がある。何よりも自国の帝国主義の侵略戦争や差別や抑圧と真つ向から対決し、どんなに流血の事態になっても帝国主義を打倒しプロレタリア革命を実現する事だと思ふ。次にサバルタンの闘い方や生き様から学び共闘の在り方を見出す事が重要だ。

具体的にはいわゆる諸戦線の闘いをプロレタリア革命の最重要課題として位置付けて闘う事が重要だ。「民族解放闘争・日本では主に入管闘争」「沖縄闘争」「女性解放闘争」「障がい者解放闘争」「部落解放闘争」「被爆者解放闘争」「アイヌ民族解放闘争」などがある。「血債の思想」は、世界革命の運動にとって必要不可欠な思想である。

グラムシのサバルタンについての論文が学者を中心に、色々出ているが、どれも非常に理解するのが難しい。私の勉強不足があるが、自分の革命家としておかれている状況に引

きつけて感じた事を書いておこうと思う。

1978年にバンブー事件というとてもない事件が発生した。それは、革共同の最高指導部による女性差別事件である。彼女は、私の連れ合いだったので凄まじいショックだった。命がけて彼女と共に多くの同志に助けられて糾弾闘争に決起し、打倒したが、結局革命家としての彼女を救う事は、出来無かった。糾弾闘争を指導してくれた福島平和同志は任務中に過労のためある地方都市のビジネスホテルで亡くなられた。残念であり悔しい。当時敵は、革共同壊滅作戦の最中であり、我々は全国を秘密に飛び回っていた。

私は公然活動に戻ったが、すぐに病気で入院し、退院・入院を繰り返しながら23年間闘病生活をし現在にいたっている。やはり闘争現場に立てない悔しさはある。

グラムシの著作と接した時強い共感を覚えた。彼は自己を取り巻く厳しい環境(障がい者・重い病気をもち・ファシストに狙われて14年間獄中にいた)をはね除けて、むしろそれをバネにしてあれだけの著作を残した。そこにあるのは、グラムシのファシストの蛮行に対する激しい怒りと、抑圧された世界の人民(サバルタン)の闘いに対する共感と溢れる愛情である。

世界では抑圧され迫害され収奪された数億の人が飢えに

苦しみ、六千万人以上が難民化して世界を彷徨っている。この凄まじい現実、グラムシも予測出来無かった事態であり、我々は、グラムシから学び世界革命の革命党として責任をもつて世界のサバルタンを重要な構成員とする労働者人民の解放を勝ち取らなければならない。そう出来無ければ世界は、崩壊し人類は、絶滅の危機を迎えると思う。

第九章 ソチエタ・レゴラータ、自己統治社会

ソチエタ・レゴラータとは、共産主義的自己統治社会の事だが、それはグラムシのヘゲモニー概念の核心をなすものだ。

1919年〜1920年トリノにおける赤い2年間の闘いの敗北の総括から生まれた概念である。

簡単に見ておくと、当時トリノの工場労働者人民は、ストライキに決起し、工場占拠・生産管理を行った。労働者に直ちに要求されたのは何か、工場評議会を指導中枢として生産を継続してゆくには電力を始めとして様々な施設や資材が、順調に整備されまた供給される必要があった。また販売という他の問題もあった。生産そのものは、想像以上に優れていた。工場占拠は、いつ警察または軍隊の攻撃にさらされるかもしれない事を示した。

工場労働者は、武器生産にも従事しなければならなかった。事態は経済的領域のものでは無くなり、純然たる政治闘争、全国的な政治闘争……全国的な政治蜂起(全国的な権力闘争)が求められていたのだ。つまり全国的に政治的・軍事的・経済的指導が出来る革命党と労働者評議会が求められていたのだ。

ジョリッテイ政権は、革命派の弱点を突いて労働者階級内部の妥協派を使いストライキに介入し、賃上げ条件の改善などで妥協的な調停を試みた。そしてストライキを壊滅させた。指導中枢が、多数逮捕された事は言うまでも無い。その後ファシストや国家権力の猛烈な反撃を受けトリノや全国の運動は、大打撃を受けた。労働者階級人民は、自己統治社会(ソチエタ・レゴラータ)形成に失敗したのだ。

グラムシは、自らが指導部として参加したトリノの労働者蜂起戦を総括し次の事を主張し実行している。

第一は、優柔不断なイタリア社会党に代わり、真の共産主義者の革命党「イタリア共産党」の新設である。トリアッチやイタリア社会党左派を結集して旗揚げした。勿論全国党としてのイタリア共産党である。

次に、労働者評議会の中に自己統治社会(ソチエタ・レゴラータ)を作り出してゆく事。そのためには労働者人民に共産

主義の教育をする事が重要だと強調している。

私には、グラムシが、ロシア革命をイメージしながら、壮大な数百万という労働者人民の決起と勝利にはヴォルシエヴィキのような、圧倒的な人民の同意と支持がある強固な革命党が必要不可欠であり、そのためには、労働者人民自身の自己統治力(ソチエタ・レゴラータ)が必要であり我々が育てなければならぬと言っているのだと思う。それは、労働者人民が本来持っている創造力・自発性・自己規律性・共同性・他人への思いやり、支配階級への怒りを取り戻せと言っているのだと思う。

ここで現代のグローバリゼーションが席卷し支配する日本と世界について見てみると、グラムシの生きた時代とは色々な面でもかなり違っていると思う(現代は、かなり深刻な危機を孕んでおり下手をすれば人類絶滅の危機があると感じる)。

現代帝国主義の世界支配という点では、社会的な矛盾の骨格は、基本的に同じだと思われし我々の闘い方も基本的に同じだと思われ。現実の階級情勢に対応しながら方針を決めるのは当然である。

問題なのは、現代社会が巨大な金融資本(架空資本・実体経済の4倍以上)の支配を許し、あまりにも複雑化し、腐敗

しきつて、戦争と間違ったテロリズムが解決策であるかのような様相を呈し、あたかも世界は、崩壊に向かっているのではないかと思わせる状況だと言う事だ。

今日世界では、一握りの巨大金融資本家の利益のために、数億人の飢餓状態の人々がいて、六千万人以上が戦争難民として世界各地を彷徨っている。新自由主義的グローバリゼーションの結果世界的に貧富の差が拡大している。またナショナリズムや排外主義が高まっている。北朝鮮・中近東・アフリカ諸国では戦争又は、戦争の危機が、高まっている。

この人類始まって以来の危機を突破し、解決出来るのは、世界プロレタリア革命だけである。

簡単に言うと

① 世界革命党の確立(その機能を果たす世界的組織)
② 自己統社会の力(ソチエタ・レゴラータ)を持つ労働者人民の組織だ。労働者人民の評議会、それは課題によっては敵の反対派も含む中広い統一戦線となる。

実際に日本で闘っている現実の組織と運動、が最も重要だ。何と言ってもやはり沖縄闘争であり最も先進的な闘いをやっておりコミュニケーションの形成を思わせるものがある。この闘いに真に学び連帯して闘ってゆけるかどうかには日本帝国主義との階級闘争におけるヘゲモニー戦(権力闘争)の勝敗がかか

っている。

その他に重要な闘争として日本の農民運動を牽引する三里塚闘争、全国の反原発闘争、京丹後市の米軍のXバンドレーダーの撤去闘争、全国の日米両軍の基地撤去闘争、反軍闘争、貧困者や会社を解雇された労働者人民の救済と援助の運動、労働組合の闘い、学生運動の復権、社会差別との闘い、民族解放闘争(日本では入管闘争)、女性解放闘争、障がい者解放闘争、部落解放闘争、沖縄闘争、アイヌ解放闘争、被爆者解放闘争、反公害闘争などがある。

日本の実に様々な闘いを、それぞれの立場や闘い方を尊重しながら統一戦線を形成し「別個に進んで共に撃つ」闘いが出来る運動体・組織が求められている。個々バラバラの闘いでは、敵階級の政治力・軍事力・経済力から言って買収されたり、各個撃破される事は、目に見えている。

現場で闘っている労働者人民が、お互いの闘いを学んで知り尊重し、助け合って団結してゆけば、一見強固に見える日本帝国主義を打倒し、新しい社会を建設出来る力を労働者人民は、持っていると言え確信する。ソチエタ・レゴラータ・自己統治社会とはその事を重要な概念として抽出した言葉だろうと思う。

ブルジョア民主主義という統治形態は、一見盤石に見え

る、しかしその本質は、「幻想性」にある。グラムシは、ブルジョア社会では、危機になれば必ずブルジョア議会が登場し危機を回避しようとすると言っている。(日本や欧米のブルジョア社会の事)この統治形態は、歴史上最も優れた統治形態だが、ブルジョアとプロレタリアートとの利害関係があたかも、自由で平等であるかのような幻想を作り出すのである。

ブルジョア社会では人と人との関係(階級関係)が、対等な商品と商品の交換関係であるかのような関係を作り出す。いわゆる労働力の商品化である。労働者が賃金奴隷になってゆくと言う事であり、人間関係の物象化現象がブルジョアイデオロギーの土台をなしている。

何故1%の巨大な金融資本家が、残り99%の全労働者人民を支配出来るのか。国家による政治力・軍事力・経済力を背景にして支配階級は、ブルジョア民主主義の柱である。議会という手続きを通して全国民に幻想のイデオロギーである国家意志を「法律」として強制するからだ。

今日支配階級の強力なヘゲモニー装置に有効に対抗出来る被支配階級のカウンターヘゲモニー装置が不十分にしか形成されていない。その重要な原因の一つは、過去と現在のスターリン主義が行った全世界の労働者人民に対する反革命的

な行為と思想である。共産主義者に対する180度間違った偏見を全世界の人民に植え付けてしまったのだ。ブルジョアジの反共攻撃が、スターリン主義発生以前より圧倒的に有効性を持つようになり、労働者人民が革命の展望を見失う原因にもなっている。

これに対し我々共産主義者は、反スターリン主義の旗を真つ向から掲げ、スターリン主義を根底から批判し、その内容を暴露し、真の共産主義社会とは、どのような社会なのかを示さなければならぬ。

重要な事は、反帝反スターリン主義の現実の巨大な大衆運動で革命の進むべき方向を示して行かなければならない。1960年代後半に我々と大学闘争で激しく闘った日本共産党は、統一戦線の相手ではあるが、かつてルーマニアの大統領だったチャウチエスク氏と共産党の委員長だった宮本顕二氏は、親友だった事をどう考えているのか聞いて見たいものだ。歴史は時代とともに変わって行くと言わなければならない。

ソチエタ・レゴラータとスターリン主義

ソチエタ・レゴラータ(自己統治社会)という概念は、労働者人民の革命運動にとって決定的に重要な概念である。労働者人民が自分自身で自分自身を統治し自己統治社会を

建設するという事であり革命運動の核心をなす概念である。自発的な創造性に富み自由で平等な社会である。革命の当初は、ほぼそうなっているが、革命の道は平坦ではなく動と反動を繰り返すジグザグを繰り返す。この時に重要な役割を果たすが革命党である。ロシア革命を参考にして考えてみると解りやすい。

1924年は、ロシア革命における過渡期で重要な時期であった。ロシア革命の最大の指導者レーニンが亡くなりスターリンがロシア共産党の書記長として登場した年である。

当時ロシアは、内外の反革命勢力との激しい内戦にほぼ勝利し、内戦による社会的疲弊から立ち上がる事が求められていた。戦時共産主義から政策を転換し新経済政策(ネップ)が始まった時期である。

ロシア国内の経済(産業や金融機関)の建て直し、農業・農民問題の解決と食料問題の解決、カスカフ地域で革命に決起した民族の取り扱い、党中央と地方組織(ムスリムやユダヤ人も多い)の自治を巡る対立、それらの事を巡って党の官僚主義的変質という重大な問題があった。レーニンは、1921年病気で倒れる頃からこの問題の重大性に気がつき手紙や面会、ある時は、直接会議に出席したが、時すでに遅し、反動的状況を阻止出来なかった。この時期スターリンは、レ

ーニンの発言を悉く妨害した。

皮肉にもスターリンは1924年4月「レーニン主義の基礎」という文書を発表し、自分がレーニンの後継者である事を確認し、ロシア共産党の書記長の座を固めた(書記長にはレーニンが任命している。スターリンは内戦指導を何もしていない。トロツキーの内戦の指導が優れていた。

その後スターリンは、レーニンが自分の後継者と思っていたトロツキーを党から追放し亡命地のメキシコで暗殺した。そして党内の反対派を次々と粛清し、また労働者人民を強制労働の施設(ラーゲリ)に数百万人送り込み、革命ロシアは、スターリン主義官僚が暴力と間違った政策で支配する刑務所のような国に変質したのである。

特に重要な事件は、1937年ロシア赤軍の参謀総長であったトハチエフスキー將軍をナチスのスパイであるとつち上げの罪をかぶせ処刑したことである。その後赤軍内部で大粛清が行われ、ロシア赤軍は、世界革命の為の軍隊では無く、ロシアの利益を守るロシア国防軍へ変質してしまつたのである。国防軍の兵士の質と戦意は、落ちた。

スターリンは、独ソ戦の危機に対して、ドイツの労働者人民に対し「ナチスドイツを倒せ」とドイツ革命を呼びかけるのでは無く、「独ソ不可侵条約」を結びロシアの労働者人民の運

命をナチスドイツに委ねたのである。その結果二千万人以上と言われるロシアの労働者人民が、ナチスドイツの軍隊に虐殺されたのである。

ロシアの地理的縦深性の深さと、ロシアの労働者人民の戦意の高さによって「大祖国戦争」を組織し、ベルリンを陥落させ勝利したが、ドイツとロシアの労働者人民の死者の数は数千万人になり、独ソ戦は、人類の戦争史上最大の被害を出した戦争になった。スターリン主義の反階級性や反労働者人民性、裏切り性は、明らかだがその発生の原因を明らかにする必要があるし、共産主義世界革命の原点から総括する必要がある。

スターリン主義体制は、共産主義革命運動の疎外体であるが、まとまった体系的イデオロギーを持つのではない。危機の深さや、種類に対応しながら様々な政策を、時と場合に応じて繰り出してゆくのを特徴とする。一貫して言える事は、スターリン主義官僚どもの利害と凄まじい権力欲、金銭欲、名誉欲が政策の基盤にあり、ブルジョア支配階級とそっくりであり、ブルジョア民主主義の幻想性が無い分だけむき出しの労働者人民の支配とならざるをえない。労働者人民を全く信頼していないし、何時人民が、決起するのかピクピクして予防反革命的國家体制にならざるをえない。危

機があると党が判断すれば、国家の暴力が直ちに発動される。必然的に党は腐敗し、汚職に塗れ、体制自身が崩壊的危機を迎える事になる。中国では、党の指導的幹部や取り巻き連中が、欧米やカナダ・オーストラリアなどに汚職で得た大量の金銭を持ち逃げていく。その数は何と1万人をこえる数だという事だ。

中国では、城管という秘密警察組織を持ち令状無しで労働者人民を拘束する権限を持ち四年間「教育施設」に送られるという。当局発表で約20万人だが民主活動家発表では約300万人だという事である。ウイグル族やチベット族などの80近くある少数民族では当局が実体を発表していないので解らないが、恐らく多数の人が拘束されていると思う。しかしスターリン主義の国家体制は、強大に見えるが以外と脆いのだ。

一つは、労働者人民の支持が全く無く、むしろ反発をかつている事。労働者人民は、反発の原因が、スターリン主義官僚どもの利害に有ることをよく知っている事。その結果、社会格差の増大、少数民族の抑圧、社会全体を腐敗が覆い尽くしている事に労働者人民は、嫌気がさして、スターリン主義の社会は、共産主義の社会では無い事を肌身で感じている。

我々は中国の民主化運動の活動家を支持し援助しなければならぬが、我々自身革命党としての過渡期社会建設の青写真を労働者人民に提起しなければならぬ。先ず革命党が、社会の最底辺で苦闘している労働者人民の立場に立ちきる事が重要だ。

そして労働者人民の怒りや悲しみ苦しみを知りまなび共有する事。そして労働者人民が本来持っている自己統制力社会形成の能力(ソチエタ・レゴラータ)を引き出す事が重要だ。そのためには、革命党による労働者人民の教育が不可欠である。

第十章 陣地戦と機動戦

「共産主義者」13号より

ヘゲモニーのための闘争において決定的なのは「陣地戦」である。戦争論における機動戦(運動戦)政治闘争における武装蜂起をさす(と陣地戦(攻囲戦・要塞戦)という用語を政治闘争に適用したものである。

① まず前提的に経済危機がそれ自体として直接に根本的な事件を生じさせることは、まったく考えられないという経済主義批判がある。

② 「東方」では国家がすべてであり市民社会は、原生的でゼラチン状であった。「西方」では国家と市民社会の間に適正な関係があり、国家がぐらつくこと、たちまち市民社会の頑丈な構造が姿をみせた。国家は、第一線塹壕にすぎず、その後ろには、要塞と砲台の頑丈な系列があった。「問題は現代国家に提起されるのであって他の所では克服され、時代錯誤的になった形態がまだ生きていく後進国や植民地には提起されない」という「国民的性格」の違いからこれが提起されている」とある。

ブルジョアジーの「陣地」としての社会民主主義、議会主義、労同組合主義、民主主義の克服はプロレタリアートのヘゲモニーの為の闘争「これが「陣地戦」である。

グラムシは、「あらゆる政治闘争は常に軍事的基本を持っている。政治は、軍事的側面よりも上位に立たなければならず、政治だけが機動と運動の可能性を作り出すと言う陣地戦(政治闘争)と機動戦(武装蜂起)の弁証法的把握に見ることが出来る。

最後にイタリアの階級情勢に詳しい立命館大学の松田博教授の聞き取りレポートの興味ある所を簡単に紹介する。

聞き手2002年、地域・アソシエーション研究所

イタリア「人民の家」・グラムシ「陣地戦」について

「人民の家」は、フランス革命の頃からヨーロッパで始まった地域の労働者人民の下からの運動であり、組織である。イタリアでは、「人民の家」が母体となってそこから労働者政党や共同組合、色んな市民運動が生まれている。現在イタリア全土に一万を超える数がある。基本的にボランティアであり、地域住民の生活の改善要求のための緩やかな運動体と言っている。

食事やお酒の安い提供、カルチャー教室、映画館、病院、障がい者の為の施設、物品の販売所、老人の集会所など地域の住民生活に必要な、場所を提供する組織である。

「人民の家」は、「ファシスト」以外のあらゆる地域住民を対象とする、組織であり、緩やかな組織規律や、ボランティアか安い会員費で運営されている。労働組合、政党、医者、弁護士、学校の教師、教授、各種職人、キリスト教の教会も参加する、地域住民の生活そのものや政治的要求などに密着した、日常的な要求を満たすための組織である。

「人民の家」をやっている人たちは、グラムシの陣地戦を、どう現代的にヘゲモニー闘争として適用してゆくかですね。これはイデオロギーではないんです。イデオロギーでは空中戦やでしよう。ヘゲモニーと言うのは、日常的に自分がどう生

きるかというところから出て来る訳です。自分の生活様式そのものから組み換えていくとか、自分の人間関係とかを見直してゆくというところから始める。単にアメリカニズム批判をやつてもそこからは何も出てこないわけですから、やつぱりオルターナティヴを提示してゆく。陣地戦と言うのはグラムシはオルターナティヴという意味で使っているわけですからね。単に既存の体制を批判するだけでは創造的なものは出来てこない訳ですから、そう言う思考能力や行動能力をどう作っていくか、と言う事が陣地戦の一番大切なところなんです。

従来のこれは日本だけではないでしょうが、非常に既成左翼型のグラムシ理解で政党中心だと理解されてきた。これはグラムシでは無くトリアッチなんですよね。構造改革論を正当化するために、グラムシはそう言ったんだと言われてきたけれども、でも全然違ふんですよ。グラムシは、政党もアソシエーションの一部だと言っているのです。政党だけが特権的位置を占めるのじゃ無く、政党もアソシエーションの一部であり、他のアソシエーションとは(階級的)役割が違うだけですね。それがロシア革命以降、ロシア革命もどちらかというとシヤコバン型革命ですから上からの革命ですから、民衆の自発的結社に対しては否定的ですから、上からの集団化で

潰してゆくんですから。

CF 人民を上から集団的に組織しようとする「ファシストの家」「スターリン主義の家」は、理論的にも現実的にも成立しないと思うが、我々革命党が、「人民の家」を労働者人民の自発的、自立的、創造的、自由で平等な活動の出来る「場」として、設定し、革命の目的に向かってその土台として組織出来るかどうか問われる。決して「赤い人民の家」にしてしまつてはならない。「人民の家」の本来の活力が失われて行くと思う。

ロシア革命は、ヴォルシエヴィキの指導による武装蜂起(機動戦)の勝利であるが、長年のヴォルシエヴィキによる広範な人民を獲得するための陣地戦を土台にしている。1924年

前後から発生したスターリン主義者の党と国家権力の掌握により、労働者人民の自発的結社、や創造的活動は、否定され、集団化されていったのである。むしろそれは弾圧の対象とされたのである。

グラムシの「陣地戦と機動戦」に対する考え方は、現代の日本の、革命運動の進むべき道を教えてくれる。

の運動を、二重権力的な意味で、現在の闘いを基礎にしなから統一戦線の運動を拡大し強化して、全日本の労働者人民を巻き込むような有効な勢力を作り出す事が出来るかどうか、日本革命・世界革命の帰趨、がかかっている。政治情勢が成熟し、支配階級が、破綻しはじめた時、機動戦(一斉武装蜂起)権力奪取のチャンスは、必ず来ると思う。その時には、労働者人民の中に長年の陣地戦による社会形成の輪郭が出来ていなければならないと思う。

現段階での結論

① この論文は、我が党の現状に対する我々の強い危機意識で書いたもので、アントニオ・グラムシの革命論から学び、現代革命論を再確立しようとする試みです。その場合革共同の過去の闘いの総括を明らかにしなければならぬが、「展望」18号に掲載された橋本利明同志の「革共同私史」は、参考になると思う。党の指導部会議で承認されていないという点や、荒川問題で彼を「シロ」と断定している点は、誤りである。「スパイ」問題という権力との関係での発言は、慎重にすべきだ。

橋本利明同志は、関西地方委員会結成以来の同志であ

り、最古参の指導者であり色々な面で我々の知らない事もあり彼の意見は、尊重すべきだと思う。また橋本利明同志自身もかつての十分の一になった党の現状から言つて「分離」よりも「結合」のために努力し党の団結のために闘つてほしいと思う。内容的に重大な歪みは無く、反軍闘争を追加してこの地平から出発してもいいと思う。勿論党の指導部全員が納得する総括は、必要である。

② 第一章から第十章まで現代革命論として必要な階級闘争上の概念をグラムシを参照して述べたものです。それぞれ密接に関連しており、内容的に深化が必要です。

現代革命の主体は誰なのか、そのためにはどういう組織と思想が必要であり、誰を統一戦線の対象として設定して闘うのか、また共産主義社会のイメージは、どういうものかなどの問題意識をもつて革命運動の骨組みや内容を簡単な素描で明らかにしようとする試みです。

今回は、問題提起であり、我が党や統一戦線の相手の同志が、それぞれ自分の分野でさらなる研究されることを期待したいと思います。

終わりに

グラムシ研究を始めてから約3年ほどたった。今日情勢が、どんどん悪い方に(戦争の方向)に展開しているように思う。今その流れを食い止めなければならぬ。我々革命党は、過去を正しく総括して新しく情勢に立ち向かわなければならぬ。

まだグラムシの「獄中ノート」や「スターリン主義」の研究が残っている。これを私の生涯の研究課題にし、他の同志と共同研究をし、適時に発表するつもりである。現代帝国主義については、他の同志達の優れた研究があり、そこから学んでゆきたい。

この文書は、1978年、バンブー事件の時に私を地獄のような状況から救い出し共に闘い、指導し、責任を果たし亡くなられた旧革共同政治局員、福島平和同志に捧げたい。

私は、大先輩の福島同志を、最も信頼出来る友人であり、指導者だったと思つています。福島同志、どうか生まれ変わった新しい我々の革命運動を見守って下さい。

共同研究者として数々の的確な序言をしてくれた座喜味盛純同志に心から感謝します。また、「スターリニズム」や「グラムシの獄中ノート」など共同研究をやりましょう。

2016年8月8日 グラムシ研究会 大伴一人

現在リオ・オリンピックが進行中であり、日本は、メダルラッシュに湧いている。戦前のナチス・ドイツが挙行したベルリンオリンピック(民族の祭典)では、宣伝相ゲッペルスの指導の下、人気の高いレニ・リーフェンシュタール女史の手で挙行され、ドイツ(ゲルマン)民族の優秀性を世界に宣伝・扇動することに圧倒的に成功した。安倍政権のナチスの手法を使った日本の戦争国家化に警戒心を持つ必要がある。

安倍政権は、オリンピックという最大の政治的・軍事的・イデオロギー的ヘゲモニー装置を使って、日本の軍事国家化につき進まんとしている。四年後の東京オリンピックが、そうならない事を切に願うものである。

2016年8月18日

